

アジア・太平洋研究センター主催、 南山大学「国連アカデミック・インパクト」関連講演会

日 時：2015年1月20日（火）

場 所：名古屋キャンパス B棟2階 B22教室

テーマ：沖縄戦と米軍基地問題から考える現代日本の平和構築

報告者：大田 昌秀（特定非営利活動法人 沖縄国際平和研究所理事長、
元沖縄県知事，元参議院議員）



大田 昌秀氏



会場の風景

アジア・太平洋研究センター講演会の講師としてお招きした大田昌秀先生は、琉球大学教授をつとめられたのち政界に転身され、沖縄県知事，社会民主党参議院議員をつとめられ，とりわけ沖縄県知事時代には平和行政の柱として，平和祈念資料館の移設と展示内容の充実，敵味方の別なく，軍人・非軍人を問わず沖縄戦で戦死した方々の名を刻印する「平和の礎（いしじ）」の建立を実現し，沖縄を通じた平和構築の形成に多大な功績を残されてきた。政界引退後も，メディアや講演会を通じて沖縄戦と基地問題などの平和問題に対する情報発信を積極的に行い，2013年には那覇市内に沖縄国際平和研究所を創設し，世界の平和と安定を実現するために情報発信を展開されている。

本講演会は，「国連アカデミック・インパクト」関連の講演会として，以上のような経歴をお持ちの大田先生に沖縄戦及び沖縄基地問題についてお話を伺うことを目的に開催されたものである。

大田先生は，沖縄戦に関する話題からスタートされたが，話の導入として取り上げられたのは教科書に記述されている沖縄戦の限定的性格についてだった。大田先生によれば，教科書に記述されている沖縄戦の期日は昭和20年4月1日から6月23日までとなっているが，これは沖縄戦の事実を反映していないとのことだった。昭和20

年4月1日は、あくまでも米軍が沖縄本島に上陸した日にちであって、実際にはそれ以前から慶良間諸島などには米軍が上陸していたことが指摘された。沖縄基地問題については、海兵隊のグアム移転の可能性などについて、日本政府の説明とグアムの実情の間に相違があるのではないかなど話題に触れながら、沖縄の基地問題とりわけ普天間基地の辺野古移設についてご自身の見解を述べられた。

講演は1時間30分以上に及んだが、大田先生は沖縄師範学校在学中に鉄血勤皇隊の一員として沖縄守備軍に動員されるなど自らも沖縄戦を経験されているご体験、また政治家として基地問題にかかわったご自身のご体験をもとにしながら、沖縄の目線から沖縄戦や沖縄基地問題を再考することが重要であることを、数多くの事例をとりあげながら熱く語られた。

講演終了後フロアからは、仲井眞前知事はなぜ辺野古移設を受け入れたのか、翁長県知事の交渉手腕はどのようなものなのか、日本政府の沖縄への対応をどう評価しているかなど数多くの質問が出された。

講演会を締めくくるにあたり大田先生は、大学生たちに対するメッセージとして、ものを知ることの喜びがいかに尊いものかを戦場で学んだことについて語られた。

(文責：星野 昌裕)